横浜市立大学 平成 25 年度「地（知）の拠点整備事業」選定取組
「環境未来都市構想推進を目的とした地域人材開発・拠点づくり事業」

うごかす●チカラ！
YCU
ニュースレター

［ 平成 27 年 vol.2 ］

目次

特集　多世代で集うための新しいまちづくり進行中
学生の活動 PICK UP!　まちづくりデザインゲームで並木地区の未来を住民と一緒に考える

特集

横浜市金沢区並木にある
金沢シーサイドタウンのふなだまりの風景

多世代で集うための新しいまちづくり進行中

～金沢シーサイドタウン　UDCN 並木ラボの取組～

金沢シーサイドタウンは、高度経済成長の中で都市へ産業と人口が集中して起きた都市問題を解決するため、1965 年に発表された横浜の六大事業の一つ「金沢沖の埋立」の中で開発された住宅地です。

1978 年に入居がはじまったこの団地も、現在、高齢化、人口減少が進んでおり、横浜市立大学では拠点を設け、これらの課題解決に向けた取組を行っています。中心となって事業を進めている本学の三輪律江准教授にその背景と内容を聞きました。

70年代、ひとと建築が調和するアーバンデザインが生まれた場所

金沢工業団地に近い場所にある、金沢シーサイドタウン。この団地を歩いていると、なぜか心地よさを感じます。

「ここは高度成長期の団地ブームの少しあと、７０年代に造られた場所。いわゆるニュータウンなどの団地のモダニズムとは一線を画した発想で造られています。著名建築家やプランナーたちがかかわった設計は、中低層住宅、ゆとりある緑地、歩道の設計や、奥や隙間が見え隠れするレイアウトなど、当時最新のアーバンデザイン発想が活かされていて、緑も豊かです。そのせいか、住民の８割がここに住み続けたいという心地よさを感じているようです。」

国際総合科学部国際都市学系まちづくりコース、三輪律江准教授は、この団地特有の空間づくりや人のネットワークに注目しています。

当時の担当者たちのまちづくりへの想いーアーバンデザインの発想は、時代を経て、私たちに「都市の心地よさとは何か？」を問うています。

金沢シーサイドタウンでは、他の団地同様に年々高齢化が進んでいます。平成２３年度には６５歳以上の高齢者人口が現役労働世代人口を超え、今後、右肩上がりで高齢者が増える予想です。※図参照

「金沢区全体で人口減少、高齢化が進んでいますが、団地はそれが顕著です。横浜市立大学でも、平成２５年度「地（知）の拠点整備事業（大学 COC 事業）」採択を機に、地域と一緒に、地域のために何かできないかと、平成２６年３月に拠点をオープンしました。この団地をリサーチした結果、1. 並木団地には高齢者と子育て世代など多世代が暮らしている。2. 健康に不安を感じる人が多い（50% 以上）。3. 高齢者の中には、外出する機会が少ない人も多い。ということが見えてきました。そこではじめたのがコミュニティづくり、コトづくり。地域の人たちが気軽に集う居場所づくりの事業です。」

高齢者と子育て世代が暮らすまちでコミュニティづくり

この拠点「UDCN 並木ラボ」で行っている高齢者の健康づくり教室や、ウォーキングポイントのサポートは特に人気で、「ここに立ち寄るのが楽しみ」という高齢者も。

「定期的にイベントや講座なども行っていますが、ここは地域の人たちが自由に使える場として提供しています。そうすることで、今度は地域住民が主体的にムーブメントを起こすようになりつつあります。」

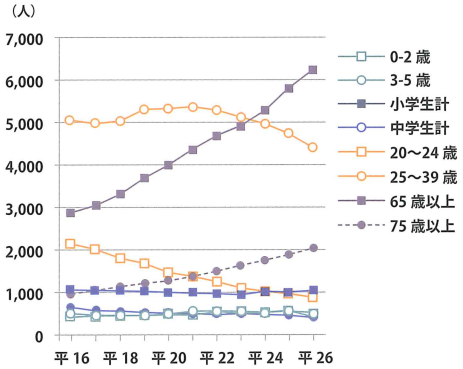
今年からスタートした“五知縁かふぇ”もその一つ。地域在住の女性２人組が健康を考えたヘルシーメニューを手頃な価格で提供するカフェが人気です。

子育てママが集う場として、子どものなぜ？から考える「並木こども哲学」といった住民発案の企画にも繋がっています。

「並木ラボでは、この拠点運営にあたり、今年度、地域、大学、金沢区、UR や公社が参加する『ラボの会』を立ち上げました。今後は地域住民主体の組織づくりをしていきたいですね。多世代が暮らす団地だからこそ、高齢者と子育て世代が手を取りながら、子育てしやすい街、高齢者がいきいき暮らせる街にするにはどうすればいいか？　お互いさまの関係で高齢者が子育てのサポート、若い世代が高齢者の見守りをする取り組みなどできないか？　などと考えています。ここは孫や子世帯が戻ってくる“住み戻り”が多そうな団地ですから、その魅力を探ることで社会課題を解決する新たな発想が生まれることに期待しています。」

中低層住宅も配置され心地よい空間をつくる１つの要因となっている

金沢シーサイド地区における年齢別人口の変化



出典：データ de 金沢シーサイドタウン（金沢区地区別データ集）（2014.3）

老若男女の憩いの場としても機能しているUDCN 並木ラボの様子

学生の活動PICKUP　まちづくりデザインゲームで並木地区の未来を住民と一緒に考える

「これからの並木を創る会（通称コレナミ）」は、金沢シーサイドタウン連合自治会、地区社会福祉協議会、NPO 法人らしく並木が連携し、住民主体で住み続けたい、また住んでみたいと思うような魅力的なまちの実現を目指す住民組織です。UDCN 並木ラボを拠点とした学生の地域貢献に取り組む中西ゼミでは、まちづくりデザインゲームを使って、まちづくりを考えるワークショップを提案し、11 月 23 日（月）に並木コミュニティハウスで行われた住民集会で、このゲームを実現しました。

このゲームは、参加メンバーが、後期高齢者、小学生、産業団地に勤めるサラリーマン、子連れの主婦など具体的な役になって、「自転車で走りやすいまちにする」などテーマにそって、それぞれが駐車場、ＡＥＤ，コンビニなど手持ちカードを使った提案を行っていくものです。良いアイデアにはコインを投票、テーマを替えて何回も繰り返すことによって、自分たちのまちづくりを新たな視点やアイデアで考えることになります。住民等 34 名、学生 13 名が４チームにわかれてゲームを行った後、多く投票された意見をもとにディスカッションし、まとめた各チームの提案がそれぞれ発表されました。

「まだプロトタイプなのですが、何回か行うことでブラッシュアップし、並木ならではのゲームを 27 年度中に作り上げたい」と代表の竹井さん。３月までには完成版の披露ができるよう準備しています。

中西ゼミ　竹井　一真さん
（国際総合科学部まちづくりコース3年）

この企画の中心となった中西ゼミの学生
3 年生：竹井一真、延澤侑司、清水俊作
2 年生：鬼頭ひとみ、野村華玲

EVENT REPORT

9/26
昨年度アンケート調査・身体機能測定調査をもとに並木地区住民に向けて健康調査報告会を開催

教員地域貢献活動支援事業「健康都市の実現に向けた健康づくりと地域づくりの融合型事業の開発と評価」（代表教員：医学群教授 田髙悦子）

医学部地域看護学教室が並木地区の 40 歳以上の住民半数を対象に昨年度実施したアンケート調査と身体機能測定・健康相談会を通して見えた課題について、住民向けの報告会を UDCN 並木ラボで実施しました。

調査の結果、この地区の 40 歳以上の住民の３割にロコモティブシンドローム（運動器症候群）リスクが、また 65 歳以上の１割に認知機能の低下の恐れがあることがわかりました。

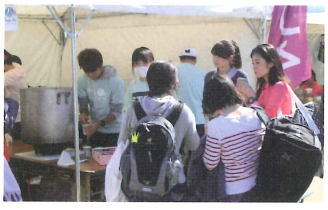
報告会では、地域看護学教室による調査報告と脳に良い生活習慣についての講話、健康づくり・地域づくりの提案に加えて、国際総合科学部まちづくりコースの学生提案も報告されました。

10/11.12
子どもたちが受け入れスタッフとなり、避難所運営を行う防災キャンプを実施

教員地域貢献活動支援事業「地域で防災活動を担う青少年育成及び、彼らの視点を生かした参加型防災プログラムの構築」（代表教員：国際総合科学群准教授 石川永子）

避難所を模した体育館で、小学３年から高校２年までの子どもたち 20 人が、障害者や家族連れなど被災者役の参加者 25 人を受け入れる実験を実施しました。子どもたちは、それまでに被災地の見学や４回のワークショップを通して防災について学習。当日は、被災者の声を聞きながら必要な対応を行い、避難所を運営しました。子どもたち自らが考えて行動するプログラムにより、地域での防災教育に役立てる研究の一環で、子どもたちは難しさを感じながらも、さまざまなニーズに対応しており、参加者の大人からは「大人でも対応は難しい」と子どもたちに感心する声が聞かれました。

10/24
八景島・横浜シーサイドトライアスロン「かなざわ八携 Soup Bar」学生がオリジナルワカメスープを提供し、地産地消を促進



横浜市温暖化対策統括本部が取り組む「海洋資源を活用して脱温暖化と親しみやすい海づくりを目指す『横浜ブルーカーボン事業』の一環として、横浜市立大学の料理部の学生が関東学院大学栄養学部とともに、地元産ワカメを使ったスープのオリジナルレシピの開発・提供を横浜シーサイドトライアスロンの会場で行いました。試食した参加者においしいと評判で、横浜産ワカメの認知度向上や地産地消による CO_2 削減ＰＲに貢献しました。

INFORMATION

学生企画のイベント情報
キャンドルナイト 金沢八景キャンパス

12月3日（木）17：55～
（雨天時は 10 日に延期）
カメリアホール裏ステージ

廃油を利用した手作りキャンドルで照らすステージ。
豚汁の配布もあり（数量限定）。
出演：ダンス部 ALMA、吹奏楽団「奏」、アカペラシンガーズ voxbox、ジャグリングサークルしゃかりきパンダ
※小学生以下のお子様は保護者同伴でご参加ください。
主催：環境ボランティア　Step Up↑

ボランティア支援室にご相談ください

「横浜市立大学ボランティア支援室」は、地域のニーズにワンストップで対応する、地域と市大生のためのボランティア窓口です。ボランティアを探している団体の方はぜひ支援室までご一報ください。

045-787-2444
voluntee@yokohama-cu.ac.jp
http://www-user.yokohama-cu.ac.jp/~voluntee/

編集　（株）tvk コミュニケーションズ
発行　横浜市立大学研究推進課地域貢献担当（COC 事業担当）平成 27 年 11 月
045-787-2205　coc@yokohama-cu.ac.jp　http://www.ycu-coc.jp

横浜市立大学　文部科学省 地(知)の拠点　環境未来都市 横浜 "FutureCity" YOKOHAMA